



**Data** 2022-48

監督: 瀬々敬久  
 原作: 重松清『とんび』  
 出演: 阿部寛/北村匠海/薬師丸ひろ子/杏/安田顕/大島優子/麻生久美子/鷹赤児/濱田岳/宇梶剛士/尾美としのり/田中哲司/豊原功補/嶋田久作/村上淳/吉岡睦雄/宇野祥平/木竜麻生/井之脇海/田辺桃子

## 👁️👁️ みどころ

とんびが鷹を生んだ。そう言われたら喜ぶべき？それとも？なぜこの男の子には母親がいないの？

『無法松の一生』は、無法松こと人力車夫・富島松五郎と美しい未亡人との切ない恋、そして敏雄クンとの“疑似父子”関係が涙を誘ったが、本作に見るホンモノの父子（とんびと鷹）関係は？

重松清の小説を、瀬々敬久監督が、昭和後半の雰囲気をつつぱり盛り込みながら映画化。昭和37年に生まれた鷹は故郷の備後市で如何に育ち、昭和54年の早稲田大学への上京に至るの？父の子離れと子の父離れはどちらが先？就職は？結婚は？昭和の後半は面白かったが、平成の30年間は？

こんな“家族の物語”も悪くはないが、私には少し違和感も・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■昭和37年にとんびが鷹を！それは昭和のど真ん中！■□■

明治時代は45年間（1868年～1912年）と長かったが、昭和の御代はもっと長く、64年間（1926年～1989年）も続いた。昭和24年（1949年）生まれの私が小学校を卒業し、中学校に入ったのは昭和37年（1962年）だが、本作で旭（アキラ）が生まれたのも昭和37年だ。

「とんびが鷹を生んだ」とは昔からよく言われる言葉だが、瀬戸内海に面した岡山県の備後市で運送業を営んでいる本作の主人公・市川安男（ヤス）（阿部寛）の“暴走ぶり”を見ていると、まさにその通り。しかし、そんな“暴れん坊”にこそ、過ぎた女房・美佐子（麻生久美子）が寄り添うものだ。

高度経済成長が続く昭和30年代、アキラの誕生によって、父親の自覚を少しずつ持ち

始めたヤスは、幸せな家庭を作り上げていたが、ある日、“ある事故”で美佐子が突然命を失ってしまったから、ヤスとアキラは突然父子家庭に。さあ、2人は昭和の後半をどう生きていくの？

## ■□■昭和の後半は面白いことだらけ！しかし、アキラは？■□■

私の中学高校時代は昭和37年4月から昭和42年3月。大学時代は昭和42年4月から昭和46年3月。司法修習生時代は昭和47年4月から昭和49年3月。弁護士登録は昭和49年4月、独立は昭和54年7月、事務所の移転は昭和59年7月だ。昭和天皇危篤のニュースは1989年12月の会食中に聞いた。1989年は、6月4日に天安門事件、11月9日にベルリンの壁崩壊という世界的な大事件が起きたが、日本ではバブルが崩壊し、平成の“失われた30年”が始まった。昭和は20年までは日中戦争や太平洋戦争で大変だったし、敗戦後の戦後復興も大変だったが、昭和37年からの昭和の後半は、昭和24年生まれの人にとっては面白いことだらけだった。しかし、昭和37年生まれのアキラは？

私は小学時代から多くの友人に恵まれたが、アキラには友人はほとんどいなかったらしい。しかし、ヤスの幼馴染の子供のいなかった照雲（安田顕）・幸恵（大島優子）夫婦や住職の海雲（磨赤兒）、さらに小料理屋の女将・たえ子（薬師丸ひろ子）らに囲まれて育てられたから、それなりに恵まれていたはずだ。ところが、備後市で中学・高校時代の反抗期を過ごしたアキラは、母親が死亡した事故の真相を父親が話してくれないのが不満だったらしい。しかし、なぜヤスはあの事故の真相を語らないの？

## ■□■父子の葛藤と対立の原因は？■□■

本作は重松清の人気小説『とんび』を瀬々敬久監督が映画化したものだから、話題性は十分。新聞紙上でも、「この春一番の感動をお届けします！」「感動！涙がとまりませんでした！」と報じられている。しかし、『キネマ旬報』4月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、3人の評論家がそろって星2つ、2つ、3つと評価が低い。それは、なぜ？

私が思うに、本作は阿部寛の絶叫型の演技が目立つのが少し難点だが、それ以上にストーリー構成上の欠陥がある。それは、なぜ、美佐子が死亡した事故の真相をヤスがアキラに秘密にしなければならないのか？ということ。父子の葛藤と対立の原因がそこにあるのなら、なおさら、それはヤスがアキラに説明すればいいだけのことで？また、ヤスが説明しなくても、それくらいのことはアキラが本気になって少し調べればすぐにわかることでは？

弁護士の私はそう考えてしまうので、母親の死亡を巡って父子の葛藤と対立が生まれていく本作のストーリー構成にイマイチ納得できない。その点、皆さんの理解と解釈は？

## ■□■親離れ、子離れは？大学進学、就職は？■□■

私は高校時代まで松山市の親元で育てられたが、大学進学と同時に親離れ、子離れを果

たした。実家にお金がないのは我が家も市川家も同じ。そのために私の大学入学については、①私立大学はダメ、国立大学のみ、②浪人はダメ、③4年間での卒業、④1カ月、1.5万円の送金は順守、という条件だったが、さて、昭和54年に早稲田大学に入ろうとしたアキラの入学は？そこにおける親離れ、子離れの姿に注目だが、何もここまで父子関係を突き詰める必要はないのでは？

続いては、昭和64年にヤスが突然、東京の出版社に就職しているアキラを訪問する時の物語になるが、なぜヤスはそんな行動に？さらに、そこから登場してくるのが、ヤスを会社に案内してくれた同僚の女子社員・由美（杏）。そこから展開していく、結婚に向けての物語は如何に？

### ■□■『無法松の一生』の昭和版！？そのレベルは？■□■

岩下俊作原作の小説『無法松の一生』は何度も映画化され、名作として評価されている。また、村田英雄が歌った『無法松の一生<度胸千両入り>』では、“無法松”こと人力車夫・富島松五郎の暴れん坊ぶりと純情ぶりが、くっきりと浮かび上がっていた。小学生の頃に同作を観た私は、「一の谷の軍（いくさ）破れ 討たれし平家の公達（きんだち）あわれ」と歌われた『青葉の笛』の切ない歌詞とメロディをハッキリと覚えている。

同作は、陸軍大尉・吉岡の良き友になった無法松と吉岡の残した妻・良子との切ない恋物語でもあるし、無法松と吉岡の一人息子・敏雄との“疑似の父子物語”でもあるから、ホンモノのとんび（父）と鷹（子）の物語たる本作とは全く異質。また、時代背景も明治と昭和だから全然違っている。しかし、暴れん坊の無法松と暴れん坊のヤスは雰囲気が実によく似ている。

とりわけ、本作ラストを飾る夏祭りのシークエンスを観ていると、単に神輿を担ぐだけで、小倉の暴れ太鼓を打つようなシーンは登場しないが、雰囲気は全く同じ。したがって、本作は『無法松の一生』の昭和版だが、そのレベルは？

### ■□■子連れの年上女性との結婚は？これでホントに幸せに？■□■

本作は139分の長尺になっているが、それは瀬々監督が父子の物語を次々と膨らませていったためだ。昭和は64年間も続いたが、昭和が終わり平成に入る頃、アキラは子連れの年上の女性・由美と本当に結婚するの？本作ラストにはそんな物語が登場してくるので、それに注目！

アキラが故郷に戻り、ヤスに結婚の許しをもらおうとするストーリーは、今時少し違和感がある。また、ヤスがそれに反対することを見通した小料理屋の女将・たえ子が、照雲や幸恵たちをうまく活用したお芝居は、ネタバレの田舎芝居と言わざるをえないから、あまり好きにはなれない。それでも、そんなドタバタ劇の結果2人はヤスたちの祝福を受けて結婚できたから、めでたし、めでたしだ。

しかし、その時既に、由美のお腹の中にはアキラとの子供がいたようだから、その後の結婚生活は大変だったのでは？私の大学時代の友人の中には、学生時代に“できちゃった婚”をした奴もいるし、子連れで年上の女性と結婚した奴もいたが、彼らのその後の人生は？そう考えると、アキラが先夫の子供と新たに由美との間に生まれた子供の2人をうまく育てていけたのかどうかはかなり疑問がある。

しかして、令和を迎えた本作のラストは如何に？瀬々監督がそれをまるでNHKの大河ドラマのような収め方をしていることにビックリだが、さて？

### ■□■この曲にも注目！これぞ昭和！マイトガイはなお健在！■□■

昭和を代表する大スターは石原裕次郎と美空ひばりだが、2人とも昭和の終焉と共に52歳の若さで旅立ってしまった。三船敏郎や勝新太郎などもみな同じだ。他方、令和に入った今も頑張っているのが、“若大将”こと加山雄三と“マイトガイ”こと小林旭の2人。80歳を超えてなお舞台上に立ち、歌っているのだから立派なものだ。

バブル時代に私もよく歌っていた小林旭の代表曲『熱き心に』は名曲だった。彼の若かりし頃の一方の代表曲が『北帰行』（61年）なら、もう一方の代表曲が『自動車ショー歌』（64年）や本作でヤスが愛唱歌（？）として歌っている、『ダイナマイトが百五十屯』（58年）。小林旭のデビュー曲として大ヒットしたこの歌を元に映画『二連銃の鉄』（59年）が作られたのだから、何ともいやはや、これぞ昭和！そして、これぞ“暴れん坊”のヤスにピッタリの曲だ。

平成の時代、令和の時代では、誰もさっぱりわからない曲だと思うのだが、令和に入った本作ラストでは、ヤス亡き後、子供たちを車に乗せたアキラが父親と同じこの歌を歌っているので、それにも注目！

2022（令和4）年4月27日記